

紫錦台中学校	重点課題推進校	教科一般・学習評価の充実
--------	---------	--------------

1 研究の重点と具体的な取組

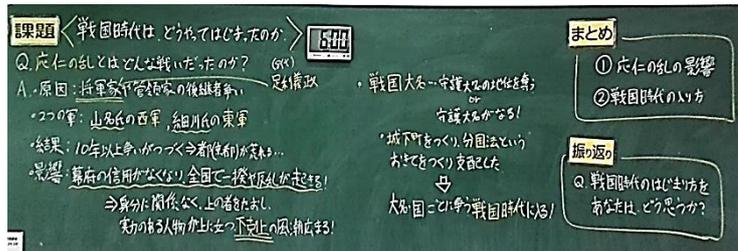
(1) 重点1 主体的な問題解決につながるまとめの時間の確保

まとめ・振り返りの時間を確保し、学びを表現させることで、生徒に学びの変容を自覚させる。さらに、生徒の能力や進歩の状況などを積極的に評価し、生徒自身が学習したことの意義や価値を実感できるようにすることで、学習意欲の向上を図る。

①黒板プレート

「課題」「まとめ」「振り返り」の3枚の黒板プレートを準備した。授業で使用する(図1)ことで、教師だけでなく、生徒にも学習評価の時間を意識させるようにした。

図1 黒板プレートの使用例



(まとめ・振り返りの視点が示された板書)

②振り返りシート(図2)

単元のはじめに、その単元のゴール(付けたい力)を示し、生徒とも共通理解を行ったうえで学習を進めるようにした。

また、全教科で共通の観点で毎時間の振り返りを行った。さらに、評価の観点が【主体的に学習に取り組む態度】となる授業や単元末には記述式の振り返りを行い、生徒が自己の学びや変容を表現することができるようにした。

図2 振り返りシート

振り返りシート		共通の観点		項目	評価	月日
				課題を意欲して学習活動に取り組んだ	A	<p>課題密度から、物質が何か決めるには、どうしたらよいか</p> <p>振り返り</p> <p>自分の到達は、正倉院にはかるといって、人は体重や手など、よいな重さをかけないようにして、その重さがおかしくなるとは、もう1回、はかり測してみたり、別の組み合わせ</p>
				学び合いに積極的に取り組んだ	A	
				課題を解決できた	A	
				自分の言葉でまとめを書いた	A	
				授業の中で新しく分かったことがあった	A	
				課題を意欲して学習活動に取り組んだ	A	
				学び合いに積極的に取り組んだ	A	
				課題を解決できた	A	
				自分の言葉でまとめを書いた	A	
				授業の中で新しく分かったことがあった	A	
				課題を意欲して学習活動に取り組んだ	A	

単元のゴール

単元のゴール【物質の性質を調べ、その性質から物質を区別できる】

最初は見た目で大体何か区別できたけど、見た目が同じになっちゃって、水の中の気体の性質が何かを理解して、色んな根拠をもとに区別することができました。気体の性質は、火のついた系管管が燃え尽きたから酸素だと思っ、たけと、より説得力のある考察にするために石灰水を入れていたら、ひとよくな、たと思ひます。

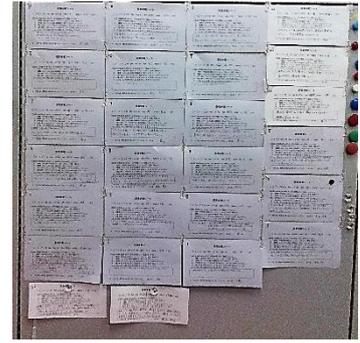
③教師の在り方を協議する場の設定

- ・校内研修会：授業づくりの方法や、授業参観の視点、課題設定の仕方、教師の役割等について研究した。校内研究授業・研究協議会を年4回、うち3回を外部から講師を招聘して実施し、授業力の向上を図った。（図3）

図3 校内研修会（指導・講演）



図4 参観シートの掲示



- ・相互授業参観週間（各学期1回）：互いの授業力向上を図った。参観シートを利用し、授業規律・課題設定・グループ活動・振り返りを中心に記入した。また、シートを参考に各自授業改善に繋げた。（図4）

(2) 重点2 表現力の育成

研究推進委員会を中心として、2部会（学力向上、キャリアデザイン）、学年研究会、教科部会で表現力育成の取組についての協議・検証・改善を図った。

①授業研究の活性化

- ・一人一研究授業を行う。実施前に教科部会で指導案を検討し、授業づくりについて、教科の共通実践・共通理解を図った。

②各部会の活動

- ・身に付けた思考力・判断力を適切に表現するために、自分の考えを書く場面を設定し、文章や資料の情報を読み取ったり、設問に対応して的確に表現したりできるように取り組んだ。定期テストでは文章や資料を読み取って説明したり表現したりする問題を「伸ばしたい力問題」として出題し正答率を集計した。その結果から、教科部会で改善策等を話し合った。
- ・各部会で行っている取組を、学校評価と関連づけてPDC Aサイクルにつなげて改善を図った。

2 取組の検証

(1) 主体的な問題解決につながるまとめの時間確保の検証

教師アンケートの「まとめや振り返りの時間を工夫している」では肯定的評価が前年度より4%上昇し、特に前期のA評価は52%と前年度と比較して12%上昇している。（図5）まとめ・振り返りの時間の確保だけではなく、視点やキーワードを示すなどの工夫を行った結果、生徒アンケート「自分の言葉でまとめたり振り返りを行ったりした」の肯定的回答前期90%後期91%、A評価前期51%後期54%とともに前年度より上昇し、生徒が自分の学びを表現できるようになってきている。（図6）内

図5

教師：まとめや振り返りの時間を工夫している

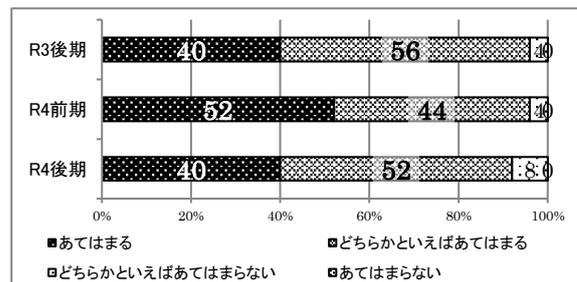
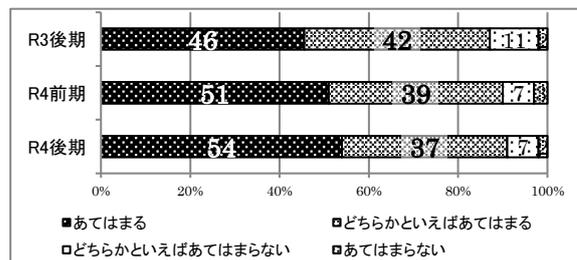


図6

生徒：自分の言葉でまとめ、振り返りを行った



容も文章量が増え、課題に応じて分かりやすく説明できる生徒も増えてきている。

(2) 表現力の育成の検証

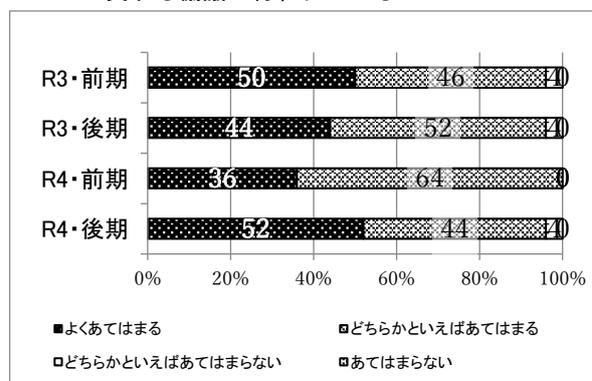
課題解決の中心活動「学び合い」をどのように授業で展開していくかを全員で共有し、日頃の授業改善に繋げ授業力の向上を図るため、研究授業・協議会を実施している。

本年度は、水戸部修治先生（京都女子大学）にご指導いただき、これまでに3回の研究授業・研究協議会を実施している。また、研究授業以外でも第4回校内研修会では水戸部先生に主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりについてご指導いただき、個別最適な学びと協働的な学びの一体化を目指す授業改善のポイントや「主体的に学習に取り組む態度」の評価のポイントについて学ぶことができた。

これらの学びを生かして教員全員が研究授業を行い、授業力向上を図ってきた。今後も校内研修の内容を校内のニーズに応じて企画し、学び合い及び学習評価の充実につなげていきたい。（図7）

図7

教師：各種部会・全体研修会等では、指導力向上に資する協議が行われている



3 成果と課題

(1) 学習評価の活用

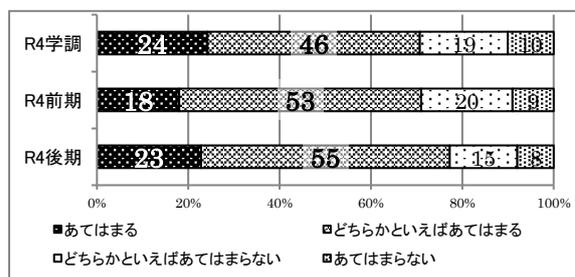
学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成のため「何ができるようになるか」まで明確化している。本年度は、「金沢型学習スタイル」の「わかった」「できた」を生徒が実感できるよう学習評価の場面の充実を主に実践を行い、生徒も自分の学びを表現できるようになってきている。今後もさらなる充実を目標に実践を行うとともに、学習評価によって生徒が「何ができるようになったか」を検証し、学習指導の改善に生かすことで各教科・科目等の目標の実現を図っていききたい。そのためには、生徒が「学び合い」を通して主体的・対話的で深く学んでいくことが不可欠であり、教師が、普段の授業づくりや生徒の見取りなど、学年会、教科部会をはじめ気軽に意見交流することが大切である。教師自身も学び合う意識をもって向上しなければならない。

(2) 自己肯定感の向上

実践初年度ではあるが、令和4年度学力調査、前後期の生徒アンケートを比較すると、「自分には良いところがあると思う」の肯定的回答は上昇傾向が見られる。（図8～10）しかし、学年集団の気質やアンケートの実施時期で多少の増減も考えられる。また、まとめ・振り返りを自分の言葉で書けない生徒も一定数見られる。これらのことから、教師は生徒自身がまとめ・振り返りを書くための手立てを工夫し、学習評価をもと

図8

生徒（3年生）：自分には良いところがあると思う



に、生徒の能力や進歩の状況を積極的に評価することが大切である。生徒が自分の変容を実感できるようになるためには、教師がどのように働きかけていけばよいのかが課題であり、次年度の研究につなげていきたい。

図9 生徒（2年生）：自分には良いところがあると思う

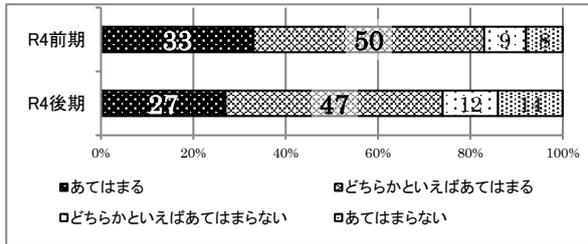
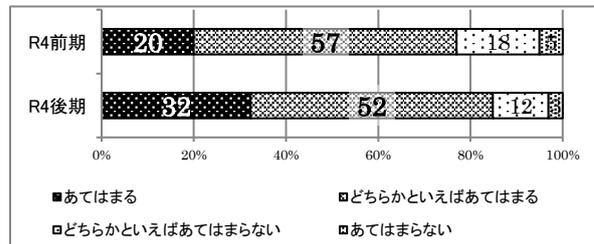


図10 生徒（1年生）：自分には良いところがあると思う



「学び合い」の様子



公開研究会の様子

